

第二十二回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

今橋 理子 著 『秋田蘭画の近代 小田野直武「不忍池図」を読む』
(2009年4月23日 東京大学出版会 刊)

今橋 理子 いまはし りこ 昭和39年(1964)生まれ。東京都出身。専攻は、日本美術史(近世絵画史)、比較日本文化論。学習院大学文学部哲学科卒業。学習院大学院人文科学研究科哲学専攻博士後期課程修了。博士(哲学)。日本学術振興会特別研究員(PD)、東海大学文学部専任講師、学習院女子大学助教授、国際日本文化研究センター客員助教授を経て、現在は学習院女子大学国際文化交流学部教授。著書には、『江戸の花鳥画—博物学をめぐる文化とその表象』、『江戸絵画と文学—〈描写〉と〈ことば〉の江戸文化史』、『江戸の動物画—近世美術と文化の考古学』、共著には、『展覧会カタログの愉しみ』、『植物画の至宝—花木真写』他がある。

受賞のことば

十代の頃、画家になることを夢見ていた私は、たった一本の線を描くということが、どれほど難しいことかを教えられ、敢え無く挫折しました。しかしその夢は、いつしか描くことではなく、絵を想い、それを「ことば」にしてみるという、研究者の道へと繋がって行きました。私を、その道へと導いてくれたのが「秋田蘭画」です。江戸博物学全盛の時代に、日本在来の画材で果敢にも洋画を志した秋田藩士・小田野直武と、彼とともに洋画制作にのめり込んだ青年武士たちの、わずか六年あまりの物語は、「新しい芸術」を生み出すという人間の情熱と、創造力の在り処を、時空を越えて現代に語りかけてくれています。

このたび、このように伝統と栄誉ある賞を受賞するにあたり、とても大きな喜びを感じておりますとともに、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。これを機会に、美術史と比較日本文化論を横断的にわたる試みが、伝統芸術研究に新しい地平を拓く光となり得ることを、多くの方々に知って頂けることを期待しております。

《選考委員評》

陳 舜臣

伝統的日本画の世界に身を置きながら、初めて積極的に洋画を吸収することを試みた秋田蘭画派画家達と彼らが描いた絵画に焦点をあてたこの評論は、近世日本が初めて接する異文化にどのように対応したかということも描き出しており、本賞にふさわしい質の高い著作となっています。

時代の制約に抗して洋画の導入に立ち向かった先人画家達の自負と押さえがたい精神の高揚が、彼らの絵画のみならず豊富な周辺資料に基づいて丁寧に読み解かれていくのが大変興味深い。さらに進んで、秋田蘭画派の絵画に秘められた前衛性をも読み解いているのは、斬新な試みであるといえます。

また、秋田蘭画派の中心人物である小田野直武の「不忍池図」に焦点を当て、他の作品よりサイズが大きいのに遅れて発見されたことや描かれたモチーフが不自然なことなど、これまで謎とされてきたテーマに対して示されている新しい解釈は、その推論に多少の飛躍があるようにも思えるものの、実に魅了的な謎解きとなっています。その当否はいずれ検証されることになるでしょうが、どのような形で確かめられていくのか興味をそそります。

梅原 猛

私は以前から、日本の人文科学のほとんどは科学とはいえないのではないかという意見をもっている。人文科学も科学であるかぎりには自然科学と同じく、従来の通説の矛盾を見

出し、その矛盾を解決する新しい仮説を立て、その仮説を綿密きわまる調査によって実証しなければならない。このような過程を経ずには人文科学とはいえないが、日本の人文科学の多くはそのような科学ではなく、西欧の学説を紹介する輸入学か、それとも国学の伝統を守る伝統学にすぎないと思っている。

しかし今橋理子氏の『秋田蘭画の近代 小田野直武「不忍池図」を読む』は、日本人の書物としては珍しく人文科学の条件を満たしている。まず小田野直武の「不忍池図」をとり上げ、その謎を一つずつ解いていく。絢爛と咲き誇る芍薬は中国絵画や浮世絵などに描かれる美人であり、はるかに見える弁天島は逢い引き宿の場所であること、そしてこの弁天島が遠くに望める地に、直武が所属していた秋田藩の別邸があったことを明らかにする。その推論は推理小説を読むように興味深く、しかもその筆は品格が高い。

さらに円窓論を展開し、円窓絵画の円窓は望遠鏡のレンズの円窓ではないかと論証する。とすれば、この「不忍池図」は、弁天島で展開される禁じられた恋の狂態を直武が望遠鏡で眺めて描いた絵ということになる。厳粛な絵の感のある直武の「不忍池図」が、歌麿や北斎などが描いた春画に極めて近い絵になる。

私は、今橋氏のこの書物を高く評価するものであるが、秋田蘭画が春画に還元されたことに多少がっかりしたことは否定できない。この著には、小田野直武とその蘭画の師である平賀源内との関係がほとんど書かれていないが、今後、その関係を明らかにすることによって、秋田蘭画と政治との関わりが明らかになろう。私は、一つの芸術を理解するには、エロスとともに政治との関わりを明らかにすることが必要だと思う。それをしっかり論じることによって、秋田蘭画の理解も一段と深みを増すのではなかろうか。

山折 哲雄

さり気ない風景を浮き上らせたまゝ、何ごとも語ろうとしない一枚の絵。それを前にして想像力を刺激され、感覚をゆさぶられた著者が、その謎解きに立ちむかっていく颯爽とした姿が印象的だ。その絵とは、幕末期、東北の秋田藩に芽生えた蘭画派の一人によって描かれた作品である。画家の名が角館藩士、小田野直武、平賀源内とも親交を結んだ洋画派の逸材だった。

著者は、はるか後世になって発見されたこの一枚の絵「不忍池図」を前にして、その新奇な構図、スリルにみちた不均衡の魅力に引き寄せられ、その背景にひそむ思想的な暗喩と、ほとんど突然変異としかいいようのない作品誕生の秘密を、一枚薄紙をはがすように明らかにしていく。

まず、江戸の名所だった「不忍池」というトポスについての鋭利な解析が鮮やかである。画家がなぜその地を選んだのか、下町の殷賑と猥雑が地をほうような虫の眼でつまみあげられていく。そこに導入されている表現技法のなかに中国絵画の濃厚な波動の及んでいることを、空飛ぶ鳥の眼球を通してつきとめていく。また、画家の人間像を通して西洋画との遭遇の意味を問い、銅版画や遠近法の採用によって彼が何を考え何を意図していたのかを解き明かそうとしている。一見するに花鳥画風と解説してみせながら、そのじつ背後には、美人画のエロティシズムをちらつかせているのだ、というリスクな絵解きを披露して驚かせる遊び心も忘れない。けれどもその叙述や言葉遣いは、全体として沈着にして冷静、ときに容赦のない評言をさしはさんで臆するところがない。先行研究を詳細に点検し、その長短を浮き彫りにしながら自己の論理と主張を組み立てていくところも堂に入ったものだ。

口絵、挿図、参考文献の挙げ方も委曲を尽しているが、たゞ口絵につけられた画家の名がすべて「小野田直武」と誤記されている。それに気づいたときの著者と編集者の驚きはいかばかりであったか。本書（初版）の価値は、この「誤記」とともに後世に長く伝えられていくであろう。